

Ⅲ 暮らしを彩る

- ・空き家に関し、住み継ぐ仕組みづくりと、斜面地に住むという新たな価値の創造をイメージ戦略として打っていく必要がある。(岡田委員)
- ・若い世代の定住促進に向け、建築行為、増改築、建替えを促進するような施策が必要である。(岡田委員)
- ・空き家の所有者と次の住み手への橋渡しのような仕組みづくりを市が主導的にやっていくことも重要である。
(岡田委員)
- ・市の文化施設は、子どもの視点をもった催事が少なくなり、子どもにとって敷居が高くなっているように感じる。
(谷委員)
- ・施設の入館者が少ないということは、事業目標に対する不達成である。きちんと分析した上で、広報、関係団体との連携等、推進するような方向も考えることができるが、やめるべきはやめるのも一考である。(古城副委員長)
- ・スポーツ実施率にこだわることなく、誰もがやりたいと思ったときにやれる環境づくりの視点が重要である。
(比山委員)
- ・基本は、支援をあまりあてにせず、自立した活動をしていくべきである。(太田委員)
- ・地域住民に対しても役割分担を持ってもらう視点での議論も必要である。(古城副委員長)
- ・行財政改革の議論がされているが、このような動きを基本計画の中にぜひ取り込む必要がある。(羽田野委員)

Ⅳ いきいきと働く

- ・企業が北九州で継続的に事業を行うため、市としてどんなインセンティブがあるのかが重要である。(羽田野委員)
- ・経済ミッションの受け入れ、派遣などを行い、北九州の産業技術力を知ってもらうことが重要である。(吉塚委員)
- ・新成長戦略の考え方も今回の基本計画の見直しに盛り込むべきである。(羽田野委員)
- ・都心部の空き地や駐車場を、都心のにぎわいに寄与するような活用をすると、税制面での優遇、建築面で容積率にボーナスを与えるなど、インセンティブを与えるような施策を積極的に行う必要がある。(岡田委員)
- ・古い老朽化したビルなどをリノベーションしていけば、今あるモノを有効に活用していくこととなる。(岡田委員)
- ・従来の固定観念的な「商店街」のイメージを打破するような、新たなベンチャー的な発想が必要である。(吉塚委員)
- ・女性、男性のそれぞれ得意とする部分を加味していけば、本当の意味での男女平等、女性の働く場が広がり、女性の観点でものを見たときの見方が変わってくる。
(細川委員)
- ・高齢者介護等に従事している人が、在宅、施設であっても多いと捉え、介護イノベーション、介護ビジネスとものづくりを結びつけて、日本全体へ発進できるプロジェクトを作ってはどうか。
(伊藤委員)
- ・女性が強いといわれる実行力をもった人材育成が必要で、女性が元気をだしてもっと挑戦できる都市でありたい。
(太田委員)
- ・にぎわいづくりの推進においても、あか抜けた方向で、第三者が見て、特に海外の人などにも訴えられるようなことを考えてもらいたい。
(古城副委員長)
- ・人口目標は、産業面からみると100万人は必要ではないかと考える。例えば、市町村合併も含め、広く捉えた視点で考えていただきたい。
(羽田野委員)